



# 殊能将之 読書日記 2000-2009

殊能将之著

講談社  
kodansha

## 試し読み

### ▶ 2001年 9月16日

今年の6月頃、とある事情からフランス語の辞書と文法書を買うはめになった。辞書と文法書が必要な用事はすぐに終わったのだが、せっかく大枚はたいたのに、これだけではもったいない。

というわけで、ポール・アルテ『赤髭王の呪い』(La malédiction de Barberousse, 1985)を読んでみた。(ただし、半分勘で読んだので、あらすじの正確さは保証しませんよ)

時は1948年、場所はロンドンのパブ〈黒羊亭〉。主人公のエティエンヌは友人のスティーブがやってくるのを待ちかねている。

エティエンヌはフランス人で、アルザス地方のアグノー村の出身。12年前にロンドンにやってきて以来、一度も故郷に帰っていない。そんな彼ののもとに、兄のジャンから突然、驚くべき内容の手紙が届いたのだった。

ある日の深夜、物音で目を覚ましたジャンが庭に出てみると、物置小屋の明かりがついている。不審に思って窓からなかをのぞくと、なんと、黒いコートに変な帽子をかぶった若い女が父親に襲いかかっているではないか! そして、その女は16年前に謎の死を遂げたエヴァ・ミュラーそっくりだ!

驚いたジャンが窓から離れ、生け垣に背中をついて恐怖に打ち震えていると、父親が戸口から飛び出してきて、家に走っていった。ジャンは父親を襲った女をつかまえようと、物置小屋に入って行く。だが、そこには誰もいないし、裏手の窓は錆びついていて、誰かが開けた形跡もない。女は煙のように消え失せてしまったのだった。

翌日、ジャンが父親に昨夜のことを訊こうとした。すると、父親はいきなりぶっ倒れ、うわごとのようにエヴァの名を口にする。あわてて病院に運んで事なきを得たが、以後、父親はこの件に関して何ひとつ語ろうとはしない。「暇がとれるようなら、一度実家に帰ってきてくれないだろうか」

と、ジャンの手紙は結ばれていた。

エティエンヌにとっても、エヴァ・ミュラーは恐怖の的であった。2年前、エティエンヌは交通事故で重傷を負ったのだが、その後遺症の神経衰弱で、夢や白昼夢にエヴァの幻を見るようになっていたからである。

さて、〈黒羊亭〉にあらわれたスティーブは、エティエンヌが渡した手紙を読むと、こう訊ねてくる。

「フランスに帰ってみるつもりなのかい?」

「休みがとれれば、帰るつもりです。ぼくもエヴァ・ミュラーにまつわる謎を明らかにしておきたいので」

「それなら専門家に同行してもらったほうがいい。名探偵のツイスト博士だよ。ぼくが連絡をとってみるから、明日、電話してくれないか」

スティーブと別れ、エティエンヌは〈黒羊亭〉から帰路につく。近道をしようとして迷ってしまい、夜道を歩いているうちに、誰かがあとをつけている気配を感じる。確かに足音が聞こえる……。

エティエンヌは橋の近くの電話ボックスに逃げ込む。すると、橋の上にあった小さな人影がだんだん近づいてくる。

黒いコートに妙な帽子をかぶった人影は、ついに電話ボックスの窓ガラスに顔をべったり押しつけてくる。その顔はまさしくエヴァ・ミュラー、しかも顔色は真っ青で、瞳に瞳孔がない！ やがて扉をこじ開けて、手が差し込まれてくる。それも2本だけではない。何本もの手が入り込み、エティエンヌにつかみかかってくるではないか！ エティエンヌは恐怖に震え、気絶してしまう。

気がつくと、エティエンヌは病院のベッドにいる。昨夜、電話ボックス付近で錯乱状態で発見されたいらしい。事情を聞きに来た警察に「エヴァの幽霊を見た」と言うが、当然信用してもらえない。

正午、退院したエティエンヌのところにスティーヴから電話がかかってくる。「ツイスト博士に話をしたら、とても関心をお持ちになられて、ぜひきみに会いたいとおっしゃるんだ。今夜8時に、ぼくの部屋に来てくれないか」

そういうわけで、雨の降るなか、エティエンヌはスティーヴのアパートに行く。

そこにいたのはツイードの服を着た年輩の男性で、鼻眼鏡をかけ、ひげをたくわえている。これこそ有名な犯罪学者にして名探偵のツイスト博士である。「まずはお兄さんの手紙を見せてくれるかね」

そう言われて、エティエンヌは手紙を渡す。読み終えたツイスト博士は、「このエヴァ・ミュラーに化けた女消失の謎解きはなかなか難しいね。わしの頭のなかにはすでに2~3の解答が浮かんでおるが、手紙を読んだだけではなんとも言えん。お若いの、この手紙にほめかされておるエヴァ・ミュラー殺しについて、話してくれんかね」

エティエンヌは話しはじめる……。

それは1932年7月のことだった。夏休み中の14歳のエティエンヌは、1歳上の兄のジャン、隣人ビシー家のフランソワとマリーといっしょに、森に秘密の隠れ家をつくりに行く。

アルザス地方の森のなか、隠れ家にちょうどいい場所を見つけた4人は、ふと小川に目をやって、びっくりする。最初は妖精かと思った。小柄な少女が小川で泳いでいたのだ。

彼女の名はエヴァ・ミュラー、歳は14歳。ドイツのドルトムント近郊に住んでいて、両親や知人とともにバカンスにやってきたという。エヴァも仲間に加えて、5人で隠れ家をつくり上げたあと、明日も会う約束をする。エヴァはモーデル川近くにある廃屋で会おうと言う。

翌日、エティエンヌたちは廃屋でエヴァと会う。

この廃屋というのが奇妙な建物で、四角い建物の上に四角い塔が建っている。入口から入ると、塔に上がる木の階段があり、塔のなかにはひとつしか部屋がない。部屋には鉄製のベッド、テーブル、そして中央に変な箱が設置されている。箱の中身は時計のメカニズムそっくりだが、文字盤はついていない。この部屋には階段しか出入り口がなく、後部に窓がひとつあるだけ。

「薄気味悪い部屋だわ」とマリー。

「でも、よく見ると魅力的だよ。まるで王族の部屋みたいだ」とフランソワ。

「赤髭王の部屋だよ!」とジャンが叫ぶ。

「赤髭王って誰?」エヴァが訊ねる。

「12世紀の皇帝で、この村が大好きだったんだって」

エヴァがこの話を気に入ったので、みんなは赤髭王ごっこを始める。エヴァは赤髭王の妻、ジャンとフランソワは近隣の紳士、マリーはその母、そしてエティエンヌは赤髭王役だった。子供たちはこの遊びを気に入って、毎日つづける。

「母さん、派手な古着ない?」ある日の夕食時、ジャンが母に訊ねる。

「なにに使うんだ?」と父。

「明日、赤髭王凱旋のお祭りごっこをするんだ」

この言葉を聞いて、父の表情がこわばる。

12世紀の歴史を研究していた父は、ある言い伝えを知っていた。赤髭王を冒瀆するものには呪いがかかり、無惨な死を遂げる……。

「警察のスタッター警視なら、歴史を研究しているから、もっと詳しく説明してくれるだろう。明日の夜にでも、話を聞かせてもらおう。とにかく、そんな馬鹿な遊びはすぐにやめるんだ!」

翌日の夜、エティエンヌたちはスタッター警視の話を聞く。

赤髭王（バルバロッサ）とは、12世紀神聖ローマ帝国の皇帝フリードリヒ1世のこと。アルザスをこよなく愛し、宮殿を建てたが、第3回十字軍に参戦し、小アジアで命を落とした。

赤髭王の死後、アルザスはアルバン・ウォルフレンが管理するようになったが、ウォルフレンは皇帝に反旗を翻し、勝手気ままにアルザスを支配しはじめた。ウォルフレンが死去したとき、赤髭王の幽霊があらわれたとの噂が流れた。

時代が下って、17世紀の三十年戦争のおり、スウェーデン軍がアグノーを占拠した。スウェーデン軍は洞窟に駐屯地を設け、唯一の入口に昼夜を問わず、見張りを立てていた。ところが、ある夜、洞窟内から悲鳴が聞こえてき

た。見張りの兵士は援軍を呼び、洞窟の入口を開けた。すると、なかにいた兵士たちが全員刺し殺されていたのではないか。もちろんなかに犯人はいないし、秘密の出入り口もない。それどころか、凶器の剣すら見つからない。

それから約40年後、今度はオランダ戦争のとき、神聖ローマ帝国軍がアグノーに侵攻してきた。当時アグノーを支配していたフランス軍は、退却の際、焦土作戦をとることにした。街に火が放たれると、怒った住民は作戦担当のフランス軍兵士を袋小路に追いつめた。「もう逃げられないぞ!」と叫んだ瞬間、袋小路を炎が包む。あわてて逃げ出す住民たち。そして、炎が収まったところで、袋小路に戻ってみると、なんとフランス軍兵士は地面に倒れ、背中に剣が突き刺さっているうえに、両手が切断されている。

住民のなかに三十年戦争時の怪事件を記憶している者がいた。洞窟のなかの兵士を皆殺しにしたり、炎のなかからあらわれて悪漢を刺し殺したりできるのは、赤髭王の幽霊以外に考えられないではないか? こうして赤髭王の呪いという伝説が完成したのであった。

これらの怪事件は大昔の言い伝えにすぎない。だが、スッター警視は自らも不可解な事件を経験していた。

1912年10月、酒場にふたりのドイツ人がやってくる。当時アルザスはドイツ領だったので、ふたりは傍若無人にふるまい、アグノーの悪口を言いはじめる。「こんなひどい土地を好んでいたなんて、赤髭王は大馬鹿野郎だ」という言葉を聞いて、住民は激昂。言い争いになったので、ドイツ人たちは酒場から逃げ出す。

住民があとを追うと、モーデル川に何かが落ちる音。見ると、川を渡る橋の上に人影がある。どうやらドイツ人たちは橋を渡ろうとして、ひとりが川に落ちたらしい。

絶対逃がさないぞ、と心に決めた住民たちは二手に分かれ、一団は橋のたもとを見張り、もう一団は先回りして対岸を見張ることにする。

やがて霧がかかると、恐ろしい悲鳴が聞こえる。なんと、橋の中央でドイツ人が刺し殺されていた! もちろん剣はないし、橋を行き来した人間もいない。

当時、ドイツ人殺害はおおごとなので、住民はその死体をひそかに埋めることにする。埋めた場所は、なんとエティエンヌたちが遊び場所に使っていた廃屋であった。

「わたしも長く警察で働いてきましたが、こんな不思議な事件はこれだけですし、いまだに謎が解けません。だから、赤髭王の呪いがあるとしか考えられないのです」

とスッター警視が言うと、エティエンヌたちは震え上がる。だが、エヴァ

だけは謎めいた微笑を浮かべている。

2週間後、エヴァが突然こう言い出す。

「あたし、赤髭王の呪いの謎が解けたような気がするの。明日試してみるから、14時に廃屋に集まってくれない?」

翌日、エティエンヌたちは廃屋に向かう。エヴァは黒いコートと黒い帽子をかぶって、待ちかねている。

エヴァは大きな鞆を持って、エティエンヌたちを廃屋の2階の部屋に連れていく。

「この鞆のなかに謎を解く鍵が入ってるのよ」

と言って、鞆を部屋の箱の上に置くと、

「さあ、16時になったら、また来てちょうだい」

エティエンヌたちを廃屋の外に出して、ただひとりなかにとどまる。エティエンヌたちは不安を感じながらも、廃屋のまわりをぶらぶらして時間をつぶす。

そして、16時になったので、廃屋に戻ってみると、エヴァは床にうつぶせになり、背中を刺されて殺されていた。しかも、死体の両目はくり抜かれていた! 床にはあの鞆が開いたまま落ちているが、中身は空っぽだ。

警察がやってきて、捜査が始まる。エヴァが廃屋にやってきたのは13時15分。エティエンヌたちが合流したのが13時45分で、死体発見は16時。死亡推定時刻は15時だが、その間、エティエンヌたちは廃屋の周囲にいて、廃屋に近づいた者も出ていった者も目撃していない。

警察は必死の捜査をつづけたが、事件はとうとう迷宮入りした……。

「すばらしい! すばらしい!」

と、ツイスト博士が言う。

「この殺人には合理的解答をつけられそうにありませんね」

スティーズがそう感想を漏らすと、ツイスト博士曰く、

「違う! 解答はあるよ。しかも、きみたちが考えているより、もっと単純な解決だ……。もちろん、わしもすべての謎が解けたわけではない。だが、すでにいくつかの謎は解けておる」

さて、休暇をとることができたエティエンヌは、11月半ば、ついに故郷に帰る。船で英仏海峡を越え、そこからは列車。ストラスブルで乗り換えて、一路アグノーへ。ツイスト博士はあとからやってくる予定である。

アグノー駅は第2次世界大戦の戦火で焼失し、仮設駅が建っている(戦後まもなくの話なのだ)。エティエンヌはなつかしさを感じながら、生家に向かう。

家の窓のひとつに明かりが点いているが、呼び鈴を鳴らしても返事がない。不審に思ったエティエンヌがあたりを見回すと、例の物置小屋に誰かいるよ

うな気がしてならない。

物置小屋に近づくと、ドアに鍵がかかっている。ノックをしても返事がないので、ドアを壊してなかに入り、手探りで電気を点けると、なんと、床には腹を刺された父親の死体があった！ しかも死んだばかりらしく、さわるとまだ温かい。もちろん窓には全部鍵がかかっている。

呆然としていると、外から声が聞こえてくる。外出していたジャン一家（妻はマリー）が帰ってきたらしい。エティエンヌは物置小屋を出て、ジャンに父親の死を伝える……。

複雑な話なので、長々とあらすじを書いてしまった。これでだいたい半分くらいです。

ポール・アルテは最近日本で一躍注目を集めているフランスのミステリ作家。本書はその処女作である。

これだけすごければ、注目を集めるのも当然だろう。傑作、ではない。「よくできている」とか「うまい」とか「斬新」というほめ言葉もあたらぬ。しかしながら、なんとというか、気迫がすごいのだ。

**「おれは大好きなディクスン・カーみたいな小説を書いて、読者をわくわくどきどきさせたいんだ！ 文句あるかっ！」**

という、すさまじいまでの気迫が行間から伝わってくる。処女作ならではの迫力といってもいい。

これはもう好き嫌いを超越したもので、カー嫌いの人でもほとぼしる無償の愛と情熱に胸を打たれるだろうし、カー好きの人は「同志よ！」と感涙にむせぶだろう。

なにしろ、まだ誰も死んでいないし、舞台のフランスにも行ってない段階で、**怪奇現象と不可能犯罪が六つも提示される**のだ。しかも、主人公が故郷の実家に到着したら、**いきなり父親が密室内で死んでいる**。これはもう、ただごとではなく、いくつかの謎解きが少々ばかげていても許す、という気持ちにさせられる。（ただし、メインのエヴァ・ミュラー殺しの解決は、なかなかよくできている）

内容どころか書き方も完全にカーで、「血も凍る (glacer le sang)」とか「戦慄 (frisson)」などの表現が多用されているし、名探偵ツイスト博士は「ふむ! (Hum!)」「お若いの (jeune homme)」といったしゃべり方をする。年齢や風貌、酒好きである点などから察するに、下敷きにしたのはH・M卿のほうかな。（まあ、フェル博士とH・M卿はほとんど同一人物ですけど）

一方、フランス人作家らしいところも散見される。たとえば、子供の遊びが重要な役割を果たしているところ。理由はさだかではないが、フランス人

は「禁じられた遊び」みたいな話が本当に好きなんですわ。

あと、アルザス＝ロレーヌ地方の風土や歴史もうまくりこまれている。(アルテ自身がこの地方の出身らしい)

わたしがamazon.frから購入したのは初期5長編の合本なので、順番に読もうと思っている。

森英俊氏の情報によると、第3長編『赤い霧』<sup>\*23</sup> (*Le brouillard rouge*, 1988) がポケミスで翻訳されるらしい。たぶん第2長編を読み終えた頃に出版されるだろうから、ちょうどいいね。(追加情報；2002年3月28日参照)

## ▶ 2001年 9月18日

ポール・アルテがどういう顔してるのか知りたくなったので、調べてみた。古そうな写真は<sup>\*24</sup> <sup>\*25</sup> <sup>\*26</sup>。近影(2001年5月付)はこちら。

調査の過程で、アルテが1956年生まれであることも判明した。

1956年生まれのフランス人が1985年に突然本格ミステリを発表したことは、1960年生まれの日本人が1987年に突然本格ミステリを発表したことに似ていると思う。新本格ムーブメントは全世界的な現象だったんじゃないかな。

ただし、フランスにアルテにつづく「新本格ミステリ作家」がいるかどうかは不明。たぶんいないと思う。だって、ほら、フランスには大学ミステリ研ないだろうから。それともあるのか？ ホルドー大学推理小説研究会とか、ソルボンヌミステリクラブとか。

あと、ハヤカワ・ミステリ刊行予定の第3長編『赤い霧』(フランス冒険小説大賞受賞作)は、どうやらシリーズ外作品で、ツイスト博士は登場しない模様。ロベール・ドゥルーズ『世界ミステリー百科』(JICC出版局)で紹介されていた、切り裂きジャックが出没する19世紀のロンドンと現代のフランスがからむという話らしいです。(追記——読んだらこういう話じゃなかった。どうやら記憶違いだったようです。失礼)

<sup>\*27</sup> ビブリオグラフィも少し訂正・増補しました。

## ▶ 2001年 9月24日

ポール・アルテ『第四の扉』<sup>\*28</sup> (*La quatrième porte*, 1987) を読んだ。時は1948年、舞台はオクスフォード近郊のとある村。

ある夜、主人公のジェイムズ・スティーヴンズは妹のエリザベスから恋の相談をもちかけられる。ジェイムズの家的小道をはさんだ向かい側には、ダーンリー家とホワイト家の住宅が並んで建っている。そして、エリザベスはこの両家の息子から恋されていた。

ジョン・ダーンリーはいい人だが、恋人にしたいとは思えない。それに、ダーンリー家には忌まわしい過去があった。戦前、ジョンの母親が屋根裏部屋で死んだのだ。母親は全身めった刺しの血まみれで発見されたが、部屋には内側から鍵がかけられていたため、自殺として処理された。ダーンリー家では戦後、上の階を賃貸することにしたが、どの入居者も3ヵ月ともたない。夜中に奇妙な足音がするため、気味悪がって出ていってしまうのだった。もうすぐやってくるはずの次の入居者、ラティマー夫妻もすぐに出ていくことだろう。

エリザベスはむしろヘンリー・ホワイトのほうに熱を上げていた。しかし、ヘンリーは曲芸や手品が大好きな変人で、エリザベスに迫ろうとしてくれない。このあいだ森でデートしたときも、いいムードになってキスしてくれるのかと思いきや、ヘンリーは「いいものを見せてあげるよ」と言って、いきなり足の指でひもを結びはじめた。ヘンリーは本気で手品師か曲芸師になりたいらしく、高名な小説家である父アーサーも半ばあきらめているようだ。

ジェイムズはエリザベスに頼まれて、ヘンリーの気持ちを確認するため、深夜、ホワイト家を訪れる。家にいたのはヘンリーだけ。両親はロンドンに演劇鑑賞に出かけていて、深夜まで帰らないらしい。

ジェイムズとヘンリーは酒を飲んで話し合い、酔っぱらって居間で寝てしまう。

深夜、電話がかかってくる。受話器を取ったヘンリーは真っ青な顔で、「両親が交通事故にあった……。ママンは死んだようだ」

ロンドンから帰る途中、ホワイト夫妻は交通事故を起こした。父アーサーは運よく無傷だったが、母ルイーザは3時間半後に死亡。最愛の妻を亡くしたアーサーは悲嘆にくれ、ヘンリーもふさぎ込む日々がつづいた。

村人はみんなホワイト家に同情した。なかでも特に同情したのが、同じく妻に先立たれたヴィクター・ダーンリーであった。ヴィクターはアーサーに無気味な考えを吹き込みはじめた。

「悲しむんじゃない。死は終わりではないんだ。きみは奥さんを取り戻すことができるんだよ……わたしを信用しなさい……」

やがて、ダーンリー家に新しい間借り人、ラティマー夫妻がやってくる。ヴィクターが「夜中に奇妙な物音が聞こえるので、入居者がすぐに引き払っ

てしまう」と正直に告げると、ラティマー夫人はこう答えた。

「あたしは幽霊なんてこわくありませんわ。それどころか……」

数週間後、ホワイト家でパーティが開かれる。ジェイムズとエリザベスが出かけていくと、アーサーとヘンリー（ホワイト家）、ヴィクターとジョン（ダーンリー家）、そしてパトリックとアリスのラティマー夫妻がいる。

シャンペンを飲みながら談笑するうちに、一天にわかにかき曇り、ものすごい雷雨になる。稲妻が光り、雷鳴が轟くと、アリスが「気分が悪い」と言って、ソファベッドに横になってしまう。

皆が心配すると、夫のパトリック曰く、

「だいじょうぶです。彼女は……霊媒なんですよ。たぶん何か降りてきたんでしょ。照明を暗くしていただけませんか」

やがてアリスはトランス状態になり、“霧の国”の光景を語り始める。ふたりの女がいて、ひとは全身傷だらけ……。

「妻のエレノアだ!」とヴィクターが叫ぶ。

もうひとりの女性は、自動車事故で亡くなったルーズで、アーサーと話したがっているという。アーサーは不信感をあらわにする。

パトリックがルーズと交信する方法を説明する。

「別室で、奥様に訊ねたい質問をひとつだけ、紙に書いてください。封筒に入れて、なんなら封蠟で封印していただいてもかまいませんよ」

アーサーは別室で質問をしたためる。封筒はしっかり封印され、封蠟の上に印章まで押してあったが、アリスはみごとに質問に答えた。

この出来事以後、アーサーはすっかりアリスの霊能力を信用し、足しげくダーンリー家に通うようになっていた。そのことが原因かどうかはわからないが、ヘンリーは父アーサーと毎日のように口論しており、大学にもほとんどあらわれなくなった。

さらに、ダーンリー家では例の奇妙な足音が聞こえるようになった。それも、ジョン、ヴィクター、ラティマー夫妻、アーサーが談笑していると、階上から足音が聞こえたのだ。すぐに階上の部屋をすべて探してみても、誰もいないし、窓には内側から鍵がかかっている。

ダーンリー邸に幽霊が出るという噂はたちまち広まり、ロンドンから取材に来るほどになった。ラティマー夫妻への来客も日に日に多くなった。最も頻繁に訪れるのはアーサーだが、そのほかにも裕福そうな中年男性をよく見かけた。

そんな11月末のある日、アーサーが何者かに襲撃されるという事件が起こる。アーサーはダーンリー邸とホワイト邸のあいだの小道に、頭から血を流して

倒れていた。どうやら鉄製のボールで殴られたらしく、頭蓋骨を2ヵ所骨折していたが、発見が早かったため、一命はとりとめ、意識不明のまま、入院した。

一方、息子のヘンリーは行方不明になっていた。そこで警察は、親子喧嘩をしかつとなったヘンリーが父を殴ったものと推定。ヘンリーの行方を追いはじめる。

事件から1週間後、ジェイムズはドリユー警部に情報提供しようと、警察に電話をかける。すると、ドリユー警部はちょうどダーンリー家でラティマー夫妻から事情聴取中だという。

ジェイムズはダーンリー家を訪問する。ラティマー夫妻はヘンリーを目撃したと供述中だった。今日、ロンドンに買い物に行ったとき、午後0時30分にパディントン駅でヘンリーを見た……。

「そんな馬鹿な!」とジェイムズは叫ぶ。「ぼくも今日、ヘンリーを目撃したんです。午後0時30分にオックスフォード駅で……」

ジェイムズとラティマー夫妻はどちらも、見かけたのはヘンリーに間違いない、と証言。ドリユー警部は不審感まるだしの表情になる。

そこへ警察から電話がある。ドリユー警部は受話器をとり、話を聞くうちに口をぼかんと開ける。

「ホワイト氏の意識が回復し、供述がとれました。あの夜、ホワイト氏が夜の散歩に出ようとしたとき、人影を見かけたそうです。人影は死体を肩にかついで、森に向かっていた。ホワイト氏はあわててあとを追ったが、人影が霧のなかに消えた瞬間、意識がとぎれた……。人影にも、かついでいた死体にも、襲撃者にも心当たりはないそうです」

そんな怪事件から3年がすぎた。アーサーは心霊主義的な作品ばかり執筆するようになり、いまだに足しげくラティマー夫妻を訪ねている。そして、ヘンリーはまだ行方不明のまま。

1951年11月のある日、アーサーがジェイムズにこう頼んでくる。

ダーンリー邸では霊の出現が激しくなり、近々実体化しそうな気配である。ラティマー夫妻の話では、ヴィクターの亡妻は自殺ではなく殺されたのであり、その犯人を教えたがっているという。

そこで、ある実験をおこなうことになった。夜、ヴィクターの妻が死んでいた部屋にパトリックが入り、扉を閉めて、蠟で封印する。30分後にドアをノックし、幽霊があらわれたかどうかを確かめる。

アーサーはジェイムズに証人のひとりになってほしいと言う。

さて、実験の当夜――。

一同は屋根裏に上がり、死体が発見された部屋に行く。廊下に並んだ四つの扉のいちばん奥、部屋のなかには木箱が置いてある以外は空っぽで、扉と反対側の壁に窓があるだけ。もちろん内側から施錠されている。

寒いからと言ってコートを取りに行ったパトリックがあらわれる。黒いコートを着て、こわばった表情を浮かべ、緊張しているのか何もしゃべらない。パトリックを残して、ドアに鍵をかけると、扉を蠟で封印して、印章を押す。

一同は居間に降り、実験終了時刻を待つ。夫の異様な様子を心配してか、アリスはそわそわしている。

30分が過ぎ、一同はふたたび屋根裏部屋へ赴く。ドアをノックしたが、返事がない。封印がそのままであることを確認してから、ドアを開くと、なかで人がうつぶせに倒れ、背中にナイフが突き刺さっていた！

アーサーが脈を取り、

「死んでいる……。こんな状況で殺されるなんて、霊のしわざとしか考えられない。これから警察を呼ぶが、警察にもそう言うつもりだ……」

そのとき、アーサーはあることに気づき、死体の顔を愕然と見下ろす。ジェイムズも近づき、死体の顔をのぞき込む。

それは、行方不明のヘンリーだった！

一同が居間に戻ると、パトリックがやってくる。コートを取りに行ったとき、誰かに襲われて、いままで気絶していたらしい。

警察がやってきて、捜査が始まる。アーサーは「この死体はヘンリーではない」と主張するが、他の全員がヘンリーと確認したため、警察はアーサーが息子を殺したのではないかと疑う。

さて、3日後、ドリュウ主任警部がホワイト邸でアーサーから事情聴取をしていると、誰かが玄関のドアをノックした。アーサーが出ていき、喜色満面で来訪者を連れてくる。

アーサーの後ろに立っていたのは、死んだはずのヘンリーだった！

……長々とあらすじを書いて申しわけない。これで半分くらいです。

冒頭から怪奇現象と不可能犯罪で押しまくった処女作とは一変し、本作はかなり余裕をもって悠々とストーリーを語っている。しかし、第2部（襲撃事件の3年後）に入るや否や、次々と意表をつく展開に。「これ、どうやって終わらせるんだろ？」と不安になるほど。

しかも、「これはこういうトリックではないか？」と見当をつけると、ドリュウ警部がそのトリックを「間違った推理として」説明しはじめたりする。アルテさん、意地悪ねえ。

メイントリック（封印された部屋での殺人）は、かなり大胆不敵な奇術趣

味で、これをばかばかしいと思うかどうか評価の分かれ目だろう。わたしはこういうの大好きですが。

とにかく、作中に出てくる“le dernier défenseur de l'authentique roman policier”（本格ミステリ最後の守護者）という称号を、ムッシュー・アルテに差し上げたい。

この作品、舞台はイギリスで、登場人物は全員英米人である。フランスと関係がある記述は、主人公ジェイムズがオクスフォード大学フランス文学科在籍中であることのみ。つまり、**フランス語で書かれているだけで、全然フランスミステリじゃない。**

フランス人がこういう小説を書くことに疑問を呈する向きもあるだろうが、わたしはいいんじゃないかと思う。そんなことを言ったら、**ディクソン・カーだってアメリカ人です。**

アーサー・ホホワイトは元々は医者で、SFやミステリを書きはじめて、小説家としての名声を得たという設定。で、妻を亡くしてから心霊主義に凝りはじめる。

これは明らかにアーサー・コナン・ドイルの経歴を下敷きにしたもの。『霧の国』はドイルの心霊主義的作品の題名だし、亡妻の名前も同じくルイーザだ。

こういうあからさまな設定は、フランス人（非イギリス人）作家ならではの、という気がする。

次は『赤い霧』を飛ばして、第4長編を読む予定。

## ▶ 2001年 9月25日

わたしはフランスミステリがあまり好きではないので、人がどのようにフランスミステリファンになるのかは、よくわからない。ただ、たぶん英米ミステリにないものを求めて、フランスミステリを愛読しはじめるのではないかと思う。

ということは、フランスミステリファンは、ポール・アルテ作品を毛嫌いしてるんじゃないだろうか。フランスミステリを愛している人ほど、こういう**エスプリのかけらもない小説**を嫌悪するような気がする。だって、皆さん、ロマン・ノワールのほうがお好きなんでしょう。違いますか。

つまり、アルテは真の意味での異端児、一種の**突然変異**なのだ。

このことはたぶん、アルテがアルザス人であることと関係が深いと思う。アルザス＝ロレーヌ地方はドイツとの国境付近に位置し、実際、ドイツ領で

あった時期も何度もあった。アルザス人はフランスの内なるエトランジェなのだ。

少なくとも、フランスの中心地からは、こういう作家は絶対出てこないだろう。

書き忘れていましたが、このページではアクサンをはずした表記を用いています。<sup>\*27</sup>アルテ作品の正確な原題はビブリオグラフィを<sup>\*27</sup>ごらんください。

\* \* \*

フランスの本格ミステリと聞くと、反射的に思い出す言葉がふたつある。ひとつは都筑道夫氏の言葉。

「細かいところまで緻密に考えられているのだが、いちばん肝心な部分が抜けていて、この話はそもそも成立しないのではないか、という疑問を感じさせる」

(記憶で書いているので、細部は不正確です)

もうひとつは瀬戸川猛資氏の言葉。

「フランス風小手先芸」

このふたつの名言は、いずれも同じことを言っている。それは、まったくフランスミステリ的ではないポール・アルテ作品を読むとよくわかる。

ポール・アルテの作品にも無理はある。彼はとびきりの不可能犯罪と意外な展開を狙っているので、どうしても無理は生じる。

だが、アルテはその無理をカバーしようとする。「こういう事情だったから」「こういう状況だったから」「こういう人たちだったから」という補完的な説明を必ず加えている。つまり、無理があることがわかっているから、言いわけするわけだ。

ところが、たいていのフランスミステリ作家というのは、**自分の書いた作品に無理があること自体をわかっていない**のである。なぜわからないかという、思いつきだけで小手先で書いているからだ。

わたしがフランスミステリをあまり好きではない理由は、そこにある。たとえば、フランス人が考える驚天動地の結末は、「四つ子だと思っていたら実は五つ子だった」などという、ばかげたものになってしまう。思いつきだけで書くからだ（と個人的には思っている）。

これは完全に偏見と自覚しているが、わたしは「**フランス人は本格ミステリについて何か重大な勘違いをしている**」という確信をいだいている。だからこそ、徹底的に非フランスミステリ的なポール・アルテにハマってしまったわけで

すが。

<試し読みおわり>



「殊能将之読書日記 2000-2009 The Reading Diary of Mercy Snow」  
著者：殊能将之  
定価：本体2700円（税別）  
講談社

**2015年6月24日発売！**